天竜中学校　吹奏楽部へ行ってきました！

今日は、コンクール自由曲を
初めて全体で合わせます。

＜顧問の　宮地　晴之先生＞

先生　「ピアノってどんな意味の記号だっけ？」
生徒A「“小さく”です。」
先生　「他には？」
生徒B「わかりません。」
先生　「じゃあ冒頭はどうやって吹けばいい？」
全員　「やわらかくですっ。」

～　♪♪　～

記号の意味を、
正しく幅広く解釈できるように何度も立ち止まります。

ピアノという記号の意味も、
生徒さんは、すでにいろいろな角度から
理解しているようです。

天竜中吹奏楽部の目標は、
先生の言うとおり吹くということでもなく、
感情のままに雰囲気で
音楽を作っていくということでもなく、
自分で楽譜を正しく解釈をして、書いてあるとおりに
演奏できるようになることなのです。

＜人生に音楽を！＞

「人に気持ちを伝える音楽」
「コンクール入賞を競う音楽」
「気持ちを開放させる音楽」
「歴史を含めた知的興味を感じる音楽」
「作曲者の意図を忠実に再現しようとする音楽」

一口に演奏する音楽といっても、
それぞれのモノサシが実は違います。

どの音楽であっても、“追求した”という事実は
他に代えがたいものです。

「全ての楽器の一番きれいな最高の音を
僕が吹けたらいいのですが、全ては難しい。
でも、楽器の魅力は、その音にあるから・・。」

ということで、年に数回、各楽器の専門家をお招きするそうです。

宮地先生が、専門家の先生にリクエストしていることは、
“その楽器のよさを知っている先生が、
生徒にその良さを教えてあげて！”

宮地先生の願いは、
“その楽器を好きになってほしい”

ただ純粋に願っているのだそうです。

＜サックスの長瀬先生＞

取材2日目。
本日は、サックスの専門家の先生がお越しになりました。

先生 「チューナー（音程をはかる機械）ばかりに頼らず、
　　音程を耳で覚えて！」
生徒 「はいっ」
先生 「楽器は響かせてなんぼなので、
　　音を強くするのではなく、響きを増やす感じで！」
生徒 「はいっ」
先生 「じゃあ、一緒に吹いてみよう」
生徒 「はいっ」
先生 「自分のお気に入りの演奏家がいるといいよ。
　　CD を聴くと、いい音が入ってくるから。
　　その演奏家の音をイメージして練習すれば
　　上達も早いしね。」
生徒 「はいっ！」

先生の吹くサックスの音色を言葉で表現すると・・
“角のないまろやかな音”
“ベルベットのような光沢感のある音”
“ビロードのようなコクのある音”
どんな表現も何か物足りなく、甘い大人の感じです。

＜何を目指すのか＞

コンクールは、目標ではなく通過点である。
という位置づけのもとで、練習は続きます。

金・銀・銅の賞の色が問題ではなく、
いい音が出せたかどうかにとことんこだわりたい、
という姿勢は痛いほど伝わってきました。

「なぜそう吹くのか・・。」
“考える音楽”を追求した後に、
その幅の中に感じる部分があるのだと先生はおっしゃいます。

音楽に正解・不正解はありませんが、
学ぶ前と後とで感じ方は確かに異なりそうです。

各パートで練習をしている教室に入るたびに、
全員起立で「こんにちはっ」という挨拶の声です。

生徒さんの礼儀のよさに、こちらも背筋が伸びる思いでした。

そんな真剣な姿勢からも、
音楽を人生のパートナーにしようとしている
多くの生徒さんがここにいるような気がしました。

“一生モノの音楽”

その土台作りを見せてもらえた気持ちで学校を後にしました。

（取材　本間）